

FDは有効に機能しているか

2007年の大学設置基準の改正によりFD(ファカルティ・ディベロップメント)が義務化されて以降、ほとんどの大学で教育改善に資する学内研修会や授業アンケートが実施されるようになった。2020年にまとめられた教学マネジメント指針では、5つの柱の中にFDが位置づけられている。さらに2022年の大学設置基準の再改正により、FDは授業改善の研修だけでなく、教育研究活動などの適切かつ効果的な運営のための様々な取り組みを含むものと、より広範に位置づけられるようになっていく。

オリオの導入率が向上していることはわかる。一方で、各FD活動の実施割合は減少もしくは維持するにとどまっておろ、活性化しているとはいえない。とりわけ、自大学の常勤の教職員をFDの専門家(ファカルティ・ディベロッパー・エド)として活用している割合は3割に満たない状況が続いている。

このような状況に問題意識を持ち、FD担当者の専門家団体である日本高等教育開発協会では2023年からEdo養成研修会の主催を始め、2024年には『大学FD入門』を上梓している。とりわけ研修会参加者からは、自大学のFDの現状に対する悩みが多く寄せられている。それらを一言でまとめると「自大学でFDを有効に機能させるにはどうすればよいか」という問題意識である。本稿では、多くのFD担当者から挙がる4つの問題を取り上げ、解決の方向性を模索したい。

限られた紙面の都合もあるため、適宜『大学FD入門』(本書)の關係章を示す。必要に応じて参照していただきたい。FDの主体性格差

第1の問題は、FDに対する専任教職員の主体性格差の問題である。一部の教員は大変熱心だが、一方で真逆の教員もいるため、どうすればFDに対して積極的な組織風土を醸成しているかという悩みである。この問題に対応する上で最も重要なことは、教員のニーズ

教職員が、学部長・学科長と連携してそれぞれに合わせたFDを様々な方法で展開するような仕組みづくりも有効である。詳細は、本書の第1、2章を参照されたい。

授業アンケートの効果的な実施・活用法

第2の問題は、授業アンケートの実施・活用法についての問題である。実施については、回収率をいかに高めるかが問題となる。回収率が高い大

果について担当教員から受講生に直接コメントしてもらおうようにするという大学もある。また、教員アンケートを実施し、「授業アンケート結果を活用して実際に授業改善をしたことがあるか」を確認し、その結果を学生に伝えることで授業アンケートに答える意義の理解を促すこともできるだろう。

授業アンケートに回答した学生自身が恩恵を受けた授業について、公開授

果についで担当教員から受講生に直接コメントしてもらおうようにするという大学もある。また、教員アンケートを実施し、「授業アンケート結果を活用して実際に授業改善をしたことがあるか」を確認し、その結果を学生に伝えることで授業アンケートに答える意義の理解を促すこともできるだろう。

授業アンケートの効果的な実施・活用法

第2の問題は、授業アンケートの実施・活用法についての問題である。実施については、回収率をいかに高めるかが問題となる。回収率が高い大

果についで担当教員から受講生に直接コメントしてもらおうようにするという大学もある。また、教員アンケートを実施し、「授業アンケート結果を活用して実際に授業改善をしたことがあるか」を確認し、その結果を学生に伝えることで授業アンケートに答える意義の理解を促すこともできるだろう。

授業アンケートに回答した学生自身が恩恵を受けた授業について、公開授

果についで担当教員から受講生に直接コメントしてもらおうようにするという大学もある。また、教員アンケートを実施し、「授業アンケート結果を活用して実際に授業改善をしたことがあるか」を確認し、その結果を学生に伝えることで授業アンケートに答える意義の理解を促すこともできるだろう。

授業アンケートの効果的な実施・活用法

第2の問題は、授業アンケートの実施・活用法についての問題である。実施については、回収率をいかに高めるかが問題となる。回収率が高い大

果についで担当教員から受講生に直接コメントしてもらおうようにするという大学もある。また、教員アンケートを実施し、「授業アンケート結果を活用して実際に授業改善をしたことがあるか」を確認し、その結果を学生に伝えることで授業アンケートに答える意義の理解を促すこともできるだろう。

授業アンケートに回答した学生自身が恩恵を受けた授業について、公開授



# FDを有効に機能させるには

FDは有効に機能しているか

2007年の大学設置基準の改正によりFD(ファカルティ・ディベロップメント)が義務化されて以降、ほとんどの大学で教育改善に資する学内研修会や授業アンケートが実施されるようになった。2020年にまとめられた教学マネジメント指針では、5つの柱の中にFDが位置づけられている。さらに2022年の大学設置基準の再改正により、FDは授業改善の研修だけでなく、教育研究活動などの適切かつ効果的な運営のための様々な取り組みを含むものと、より広範に位置づけられるようになっていく。

このように、FDは高等教育機関における教育を中心とした改革や改善の手段として益々その重要性を増していると考えられるが、各大学におけるFDはここ5年で進歩したのだろうか。文部科学省の調査を概観すれば、専任教員のFD参加率やティーチング・ポート

果についで担当教員から受講生に直接コメントしてもらおうようにするという大学もある。また、教員アンケートを実施し、「授業アンケート結果を活用して実際に授業改善をしたことがあるか」を確認し、その結果を学生に伝えることで授業アンケートに答える意義の理解を促すこともできるだろう。

授業アンケートに回答した学生自身が恩恵を受けた授業について、公開授

果についで担当教員から受講生に直接コメントしてもらおうようにするという大学もある。また、教員アンケートを実施し、「授業アンケート結果を活用して実際に授業改善をしたことがあるか」を確認し、その結果を学生に伝えることで授業アンケートに答える意義の理解を促すこともできるだろう。

授業アンケートの効果的な実施・活用法

第2の問題は、授業アンケートの実施・活用法についての問題である。実施については、回収率をいかに高めるかが問題となる。回収率が高い大

果についで担当教員から受講生に直接コメントしてもらおうようにするという大学もある。また、教員アンケートを実施し、「授業アンケート結果を活用して実際に授業改善をしたことがあるか」を確認し、その結果を学生に伝えることで授業アンケートに答える意義の理解を促すこともできるだろう。

授業アンケートに回答した学生自身が恩恵を受けた授業について、公開授

果についで担当教員から受講生に直接コメントしてもらおうようにするという大学もある。また、教員アンケートを実施し、「授業アンケート結果を活用して実際に授業改善をしたことがあるか」を確認し、その結果を学生に伝えることで授業アンケートに答える意義の理解を促すこともできるだろう。

授業アンケートの効果的な実施・活用法

第2の問題は、授業アンケートの実施・活用法についての問題である。実施については、回収率をいかに高めるかが問題となる。回収率が高い大

果についで担当教員から受講生に直接コメントしてもらおうようにするという大学もある。また、教員アンケートを実施し、「授業アンケート結果を活用して実際に授業改善をしたことがあるか」を確認し、その結果を学生に伝えることで授業アンケートに答える意義の理解を促すこともできるだろう。

授業アンケートに回答した学生自身が恩恵を受けた授業について、公開授

京都橘大学 西野毅朗

**大学FD入門**

中井俊樹 西野毅朗 監修  
佐藤浩章 竹中翔太 著

教育改善に取り組む人の必携ガイド

教員研修、授業アンケート、カリキュラム開発……FD担当は何をする？どんな知識が必要なの？これ1冊で仕事に長く続けるための実定版

ナカニシヤ出版

個人教員のニーズだけでなく、学部・学科・専攻といった教育組織単位でのニーズもある。これに